

フィリピン北部ルソンにおける日系人と「イゴロット」の関係性

森 谷 裕美子

はじめに

竹沢は、近代において排他的性格をもつ認識的カテゴリーとして膨張し、制度化された「他者」を創出してきた概念の一つに「人種」(race)をあげる。彼女によれば「人の移動は新たな境界を造り出し、その移動によって現実となった異質なものととの遭遇とそれに続く相互作用において新しい「自己」新しい「他者」の生成」が始まるが、ここに「人種」概念が最も明瞭に表出するのは他者を排除する時であるという。しかし、この境界は誰を「他者」とするか、誰を排除する対象と置くかによって極めて恣意的に変化することも指摘する〔竹沢 1996: 265-266〕。

本研究の対象となるフィリピンは、国際移民とりわけ海外出稼ぎ労働者の主要な送り出し国であるが¹⁾、歴史的にみれば日本もまた、かつては移民の供給源として重要な役割を果たしており、過剰な人口と就職難のため、高度経済成長を迎えるまで、多くの日本人がより高い賃金を求めてフィリピンへ出稼ぎ労働者として渡って行った〔外務省領事移住部 1972: 137, 143〕。これまで、こうした日本とフィリピンとの双方向の人の移動によって、「自己」と「他者」のさまざまな関係が生成されてきたのはいうまでもないだろう。

そこで本稿では、日本からフィリピンへの移民、とりわけその数が急増した1903～1904年に北部ルソンのベンゲット道路の建設に携るため渡航した「ベンゲット移民²⁾」と呼ばれる人々と、それに続く日系人³⁾のさまざまな社会関係について取り扱うが、ここで彼らに注目するのは、彼らベンゲット移民がまさにフィリピンへの集団移住の先駆者でありフィリピンのその後の移民の流れを作り出したということ、彼らのなかには現地の「イゴロット」と呼ばれる先住民族と結婚して子供をもうけた者も多く、そうした現地社会の人々と比較的良好な関係が築きあげられていたということ、そして、そこには常にさまざまな「自己」と「他者」の関係が生成されてきたということによる。そうした関係が北部ルソンにおいていかに作られてきたかを、その社会的背景から明らかにすることで今日のさまざまな移民問題を考察することが本

稿の目的である。とりわけ極めて多様化、複雑化した「国際移民の時代 (the age of migration)」を迎えた今日において〔カースルズ S. / M. J. ミラー 2011〕、こうした歴史を顧みること、今後どのようにさまざまな移民との関係を作っていくのかを問うことは、我々に与えられた大きな課題の一つであるに違いない。

なお本研究は、JSPS 科研費2352009による研究成果の一部である。

1. 「イゴロット」と日系人

戦前の東南アジアにおける日系人のなかでもフィリピンの占める割合は高く、特に1930年代には全体の半数以上を占めていたが、その嚆矢となったのが本稿でとりあげるベンゲット移民である。フィリピンでは1910年頃よりミンダナオ島ダバオで麻栽培に従事する日系人が増加するが⁴⁾、実は、それ以前においてはベンゲット移民のような土木労働者や大工がその主流であった〔橋谷 1985〕。しかしいずれにせよ、こうした工事やその後のバギオの開発、ダバオの開拓が行われた土地は、紛れもなくフィリピンの先住民族の住む土地であり、日系人の移住によって、そこにさまざまな関係が構築されていった。そこでまず、ベンゲット移民が北部ルソンで出会った先住民族イゴロットとはいかなる人々で、いかなる歴史を経験してきたか、それが日系人との出会いにどのように彼らが関係するのかをここでは明らかにする。

(1) イゴロット

イゴロット (*Igorot* / *Igolot*) という名称は、ルソン島北部コルディエラ山脈地帯に主として居住する、紀元前1500~500年頃にフィリピンに移住してきた古マレー系の先住民族の人々の総称で、かつてフィリピンを植民地支配したスペインが自分たち「文明化された社会」とは異なる「エキゾチックな他者 (Other)」として彼らと呼び現わした用語である。当初、スペイン人はこの用語を旧ベンゲットおよび旧レバント州に居住する人々に対して使用していたが、後にヌエバ・ビスカヤ州やマウンテン州に住む人々にまで拡大して使われるようになっていった⁵⁾〔Jenks 1905: 27〕。具体的にはアパヤオ州のイスネグ族 (アパヤオ族)、カリंगा州のカリंगा族、マウンテン州のポントック族、イフガオ州のイフガオ族、ベンゲット州のカンカナイ族、イバロイ族、イロコス・ノルテ州およびアブラ州のティンギャン族 (イトゥネグ族) などがこれにあたる (図1)。

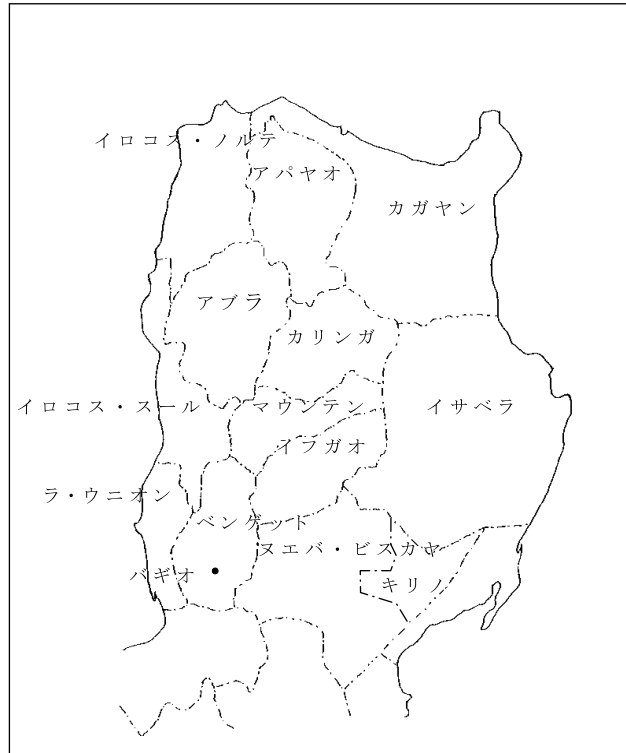


図1 北部ルソン地域

北部ルソンに住むイゴロットとスペイン人との出会いは、1572年に探検家サルセド Juan de Salcedoによって行われたルソン島北西部沿岸のイロコス地方への遠征に始まるといわれる。この遠征で、多くの金がこの地で産出されることを知ったスペインは1624年にさらなる内陸への遠征を行い、イバロイ族の住む土地にまで踏み込んだ〔Keesing 1962: 31-32, Prill-Brett 1990: 2-3〕。その後も遠征は何度となく繰り返され、やがてマウンテン州やカリंगा州にまで到達するが、そこでさまざまな抵抗に会い、結局、スペインはそれに対し何回か制圧を試みたが何れも失敗し、彼らを完全に服従させ金鉱を占領するには至らず、低地の総司令部 (Comandancia Politico General de Igorotes) から緩やかな統治を行うに止まった。

他方、彼らをキリスト教化させるための活動も進められ、18世紀には聖アウグスチノ修道会の活動がベンゲット州で活発になり、そこで多くのイゴロットが洗礼を受けたが、実際には彼らが土着の精霊信仰をやめることはなかった。また北東部のカガヤン州でもドミニコ会の活動が活発になり、カリंगा州近くに教会が建てられ、キリスト教化が進められた。これらの活動の結果、一部の、北西部沿岸域に親戚を持ち低地に住むようになったイゴロットの間ではキリスト教が浸透していったが、それ以外

の人々は依然としてスペインの支配に抵抗を続けた。そのため、スペイン到着から約100年の間に、改宗し「教会のベルが聞こえる (within the sound of bell)」所に住むキリスト教徒と、山岳地帯に住むイゴロットとの区別が徐々に出来上がっていった。さらに1700年代の半ばにはスペインが敵対するイゴロットを鎮圧するために低地民を徴兵したが、このことが低地キリスト教徒とイゴロットとの社会的、政治的境界を確固たるものとさせていったという。こうして徐々に北部ルソンのスペイン化、キリスト教化が進んでいくが、19世紀になると、今度はイゴロットたちのさらなるキリスト教化や支配、開発を進めるため積極的に道路を整備し、各地に学校を建て居留地を造っていった〔Afable 1998: 90, Scott 1982, Wilson 1965: 66-80〕。

スペイン統治時代、イゴロットは結局、スペイン人の支配・搾取の対象に過ぎず「無法者 (Remontados)」として差別されたが、1898年にスペインに代わってフィリピンを支配したアメリカもまた、西欧的な価値尺度でもって彼らを「無知 (ignorancee) から救うべく」扱った〔Villarba-Torres 2005, Scott 1982: ix - x〕。そこで「植民地的介入の全領域を可視化するため」1903年に国勢調査を行ったが⁶⁾、フィリピンについてほとんど知識のなかったアメリカはこれに先駆け幾つかの調査を行っており、1900～1905年にかけて文化人類学者による民族学的調査も行われた⁷⁾〔ラファエル2004: 136-137〕。そこでは、それまでほとんど知られていなかった北部ルソンの山岳地帯や南部のミンダナオ島の膨大な数の部族 (tribes) に関する報告がなされたが、これらは結局、『1903年センサス』では、キリスト教徒に改宗した8の部族を含む24の部族に統合された〔Census of 1903, vol. 1: 467-468〕。そして、これを「キリスト教徒あるいは文明化された部族 (Christian / Civilized Tribes)」と「非キリスト教徒あるいは野蛮な部族 (Non-Christian / Wild Tribes)」という2つのカテゴリーに分けたが、この野蛮な部族とはまさにアメリカへの忠誠を欠いた (*infiel*) 人々に他ならず「ほとんど完全なる野蛮な状態から文明の黎明期までのさまざまな段階にある人々」で、さらにこれを①残忍で移動性の高いルソン島の首狩り族やムスリムの一部、②平和を好み定住する多くのイゴロット、③平和を好み移住性の高い臆病なネグリートやミンドロ島のマンガヤン、ミンナダオ島の異教徒、④かつて「キリスト教社会の無法者」と呼ばれスペインに抵抗し続けた人々、の4つのカテゴリーに分類した〔Vergara, Jr. 1995: 47-50, Census of 1903, vol. 1: 22-23〕。しかしその一方で、アメリカにとっては文明人と未開人の区分は相対的かつ移行的なものであり、未開人が「野蛮な」段階にあるのはスペイン人が彼らを征服できなかったという歴史的事実によるもので、むしろ「未開人」は植民地の理想的な被支配者であって、より強健なアメリカがこの状況を打破することができると考えていた。つまりアメリカは単に

『1903年センサス』によって植民地社会の状態を単一の人種的ヒエラルキーとして想像したに過ぎなかったといえる〔ラファエル2004: 127-160, Worcester 1914〕。

こうして植民地支配の長い歴史から人種的差異が生まれ、その相対的価値が評価・ランク付けされていくが〔ラファエル2004: 150-154〕、イゴロットにとってこのような植民者のまなざしは、植民地支配が終わった後でさえ解消されることはなく、今度は長年にわたる植民地支配下で作り上げられた「低地キリスト教民」によって継承されていった〔Scott 1982: ix - x〕。

（２） 植民地支配と社会変容

こうした植民地支配の歴史のなかで、イゴロットは「未開人」のレッテルを貼られ、やがてイゴロットという名前そのものが差別的な意味をもつようになるが〔Scott 1969: 154-172〕、この名称自体は、もともと北西部沿岸や低地に住む人々が、交易をするために隣接する山岳地帯からやって来た人々を呼び現わすための用語であったようで、字義通りイゴロットのゴロット *golot* は山、*i* は「～の人々、～から来た人々」を意味していた。スペインが初めてこの地にやって来た時にはすでにこの「山の人々」が塩や布、鉄、装飾品、中国製の磁器、炆器、家畜などを金と交換し⁸⁾、ここで手に入れた物の幾つかは別の仲介者によってさらなる奥地へ運ばれ、山岳地帯全域に広まっていった。とりわけベンゲット州のイバロイ族はその中心的なメンバーであって、ラ・ウニオン州やイロコス・スール州などに交易パートナーを持っていたが、スペインによる支配が強まると、今度は低地からやってきた同胞の「より文明化した」フィリピン人が彼らと取引をするようになり、しばしば彼らに騙されたり搾取されたりするようになった〔Guy 1958: 58-61, Keesing 1962: 31-32, Prill-Brett 1990: 1-2〕。スペイン統治下、こうしてイゴロットの社会にも徐々に貨幣経済が浸透していくが、イゴロットたちはすでに19世紀末には貨幣の意味を理解しており、それを正しく使用することができるばかりか1から何10万もの数を正確に数えることができたという〔Scott 1982: 239〕。

やがて植民地宗主国がスペインからアメリカに変わると、今度はアメリカ人が北部ルソンにやって来るようになるが、そこでは、その避暑地・夏の首都としてのベンゲット州バギオの開発が計画され、マニラとバギオを結ぶベンゲット道路の工事が進められた（図1）。この道路が完成したばかりの頃はバギオにはアメリカ人の店が1件と中国人とフィリピン人の店が数件あるだけであったが、その後バギオでは建築ブームが起こり、さまざまな施設や住宅が建設され、これに乗じて、大工やコック、鍛冶屋としてフィリピンへ来ていた中国人移民の子孫たちがここで鉱山関係者や低地

からの観光客向けのパン屋や食堂を経営するようになっていった。また低地の富裕層がこの地に別荘を買い求め、さらに夏の首都として機能するために事務職員や技術者が低地から導入されると、彼らもやがてこの地に定着していった。

いうまでもなく、もともとこの地はイバロイ族の土地であり、かつては *Kafagway* (牧草地) と呼ばれ、以前はイバロイ族27家族が住んでいたが、その後、その土地の多くが収用されたり、よくわからずに売られたり、土地の登記を怠ったために公有地とみなされたりして失われた [Prill-Brett 1990: 6-8]。こうした社会の急激な変化と貨幣経済の浸透はイゴロット、とりわけイバロイ族の生業形態に大きく変容を迫ることになり、その多くが現金収入のために公共工事の荷役や鉱山労働、家事労働などの賃金の安い非熟練労働に従事するようになっていった⁹⁾。さらにラ・ウニオン州とバギオをつなぐナギリアン道路やマウンテン州のポントックとバギオを結ぶハルセマ道路が整備されると、これまで「伝統的な」生活を送っていた人々までがこの地に現金収入を求めてやって来るようになり [Bagamaspad and Hamada 1985: 237-240]、やがて山岳地帯や低地からも多くの労働者や移住者が継続してバギオを訪れるようになった。こうしてその後の約10年間で、かつてのイバロイ族の牧草地は「小さなアメリカの街 (Small American City)」へと変貌を遂げていったのである [Tapang Jr. 1985: 32-38, Prill-Brett 1990]。

一方、19世紀の末にはすでにベンゲット州でスペインによる高原野菜の栽培実験が行われており、20世紀にはバギオ周辺に住むヨーロッパ人の食卓にそうした野菜が登るようになっていたが、やがてアメリカ人や日系人、中国人によって大規模な野菜の栽培が行われるようになり、ここでも多くのイゴロットが雇われた。こうした商品作物の栽培が浸透する以前のベンゲット州の農業は、そのほとんどが自分たちで消費する米やイモ類などを栽培する家族経営であって、基本的に労働力は近隣の人たちとの共同労働によっていた。しかしアメリカがバギオに住むアメリカ人の食糧を確保するため、さらにはイゴロットたちを早く「近代的な社会 (modern world)」に統合させるために農業開発が重要であると考え、それを積極的に進めたことで産業としての野菜の栽培が飛躍的に発展したという [Tapang Jr. 1985: 33, Reyas-Boquiren 1989: 12-19]。

(3) イゴロットと日系人の出会い

先に述べたように、アメリカはバギオを開発するためにベンゲット道路の建設を計画したが、アメリカにとってその完成は、避暑地へのアクセスを容易にするだけでなく、ここで産出される金、銅などの鉱物資源や工所用木材を確保するために、さらに

は大規模な工事を行うことでフィリピン人にアメリカの力をみせつけるために、必ず実現させなければならないものであった〔早瀬 1989b: 35-41〕。しかし実際には、工事は難航し、当初予定していた予算も大幅に上回ることとなり、責任者は2度解任されその継続が危ぶまれたが、新たに任命されたケノン少佐 Major Kennon, L. W. V. が工事ルートの変更ややり直し、労働力不足を補う新たな労働者の導入を行って、ようやく完成へとこぎ着けた。この時、それまでのフィリピン人や白人、中国人の労働者に加えて1903～1904年に新たに導入されたのがベンゲット移民と呼ばれる日系人であるが、その多くは「手に職のない寒村出身の農民」の短期の出稼ぎ労働者であった〔早瀬 1989a: 72-73, 1989b: 5, 42-66, 198, Read 1999: 76-91〕。いうまでもなく彼らはこの道路の建設のために雇われた労働者であったから、道路の完成と同時にそのほとんどが失職し、多くが帰国したが、工事終了後もここに留まった移民たちはその後、大工や石工、製材工、測量技師、庭師などとしてアメリカ人に雇われ住宅、ホテル、学校、公園、橋などの建設に関わったり、バギオ北部やトリニダッドで農業に携わったりするようになった。その後のさらなるバギオの発展によって、だんだんと日系人も安定した職を得ることができるようになり、1920年代頃から新たな鉱山開発が始まると、今度はそこでも多くの日系人が働くようになった。また、成功した初期の移民が同郷の若者を呼び寄せる形で新たな移民がやって来るようになり〔佐藤 1993: 150〕、さらにこれらの日系人や避暑に訪れる観光客をターゲットとする商業も発展、1920年代から30年代にかけてバギオの中心街にはフィリピン人、中国人の店と並んで日系人が経営する雑貨店、デパート（バザー）、病院、菓子屋、自転車屋、薬局、写真スタジオ、家具屋などが軒を連ね、バギオやベンゲット州の社会経済生活の一角を彼らが占めるようになった〔Afable 2004a: 48-52〕。また1930年代に国際的な金価格の高騰によるゴールドラッシュが起こると、バギオ周辺でも10近い鉱山が新設され、多くの日系人が大工や監督、技術者としてそこで働き、鉱山の新設によって木材の需要が高まると、今度は製材会社でも多くの日系人が働くようになっていった〔Afable 2004a: 52-53〕。

一方、バギオ市の郊外には製材工や大工などとして働く日系人たちの集落が形成されたが、そこで彼らはイバロイ族から土地を借り、仕事の傍ら野菜を栽培して市場で売るようになった。さらに、1910年代末にマニラへの供給ルートができあがりバギオ野菜の需要が高まると、日系人はより広い土地を求めて北部のトリニダッドに移り住み、そこで大規模な農業経営を行うようになっていった。こうして、もともとイバロイ族の土地であったトリニダッドもまた数年のうちに日系人の経営する野菜畑へと変貌し、1920年代には日系人の最初の協同組合も設立された。やがてこうした日系人は

農業を主たる生業とするようになり、そこでは70~80世帯の日系人家族が農業に従事し、耕作地は300haにも及んだという〔金ヶ江 1968: 369, Afable 2004a: 47-48, 52〕。

これらベンゲット移民たちの多くは短期の出稼ぎが目的であったため、年齢的に高い者も少なくなく、妻子を残しての渡航者もいたが〔早瀬 1989a: 72-73, 1989b: 198〕、なかには若くして単身で赴任した男性もあり、彼らは日本に帰国したいという願望がさして強くなかったために、その多くがイゴロットの女性と結婚し、この地に定着した¹⁰⁾。こうした関係については、ベンゲット道路工事にイゴロットの若い男女が雇われていたため¹¹⁾「生死を共にしながら働くこの難工事で、日本の移民労働者とイゴロットの娘との間にいつしか人種を超えたロマンスが芽生えてイゴロットを妻にした者もあった」などといった説明も可能であろうが〔金ヶ江 1968: 690〕、実際にはベンゲット道路工事だけでなく、バギオの開発が進むにつれ、その後もさまざまな場面で日系人とイゴロットとの出会いがみられた。

日系人と結婚した女性たちの多くは「若くて無教育ではあったが頑健で働き者であり、大胆で冒険家」でもあった。彼女たちは、親族や他村の人々がベンゲット州に出稼ぎに行ったことを聞きつけると、「今度は自分たち」とばかりに、より良い暮らしを求めて遠方まで出かけて行ったという。その目的地はバギオやトリニダッドにある日系人が経営する農園であり、その他、建設中の橋や道路、トンネル工事の現場などにも商売に出かけ、それらが日系人と彼女たちが知りあう格好の場となった。たとえば他村の仲間と一緒にポントックから5日歩いてバギオ北部のギサドに辿りついたラヤンLayanは、そこでゼンゾー・ハマダZenzo Hamadaと出会い、ポントック族のカタリーナCatalinaは仲間と一緒に野菜や果物をポントックのマリテップにある橋で工事をしていた日系人に売りに来ていて、そこでヒョウジロウ・ウダHiojiro Udaと出会っている。またベンゲット州トゥバのアシン温泉近くに住むイバロイ族のフェリサFelisaは近くで行われていたトンネル工事で働く人々に酒を売りに来ていて、エイジロウ・シモツEigiro Shimotsuと出会ったという〔Tamayo 2004: 251-252, Dacudao 2010: 133〕。また、イバロイ族の有力者の娘ジョセファ・カリニョJosefa Cariñoは日系人と2度結婚しているが、一人目の夫はバギオに最も早い時期にやってきた日系人の一人で、ヘアルド製材会社の技師として働いていたリュウキチ・ハマダRyukichi Hamadaであった。彼は1912年に事故で亡くなり、その後、ベンゲット移民としてやって来た大工のテルジ・オオクボTeruji Okuboと農場で知り合って結婚している〔Hamada 1975, Okubo 2004〕。またイゴロットの妻たちが親族の結婚をアレンジする場合もみられ、たとえば先のテルジ・オオクボの兄弟ノボルNoboruの妻はテルジのイバロイ族の妻の紹介であり、ショウサプロウ・ヒガシジ

Shosaburo Higashiji のイバロイ族の妻は彼の農園で働くイゴロットの紹介であったという〔Tamayo 2004: 252〕。

このように、当時は日系人がイゴロットの女性と知り合う多くのチャンスがあったが、とりわけトリニダッドの農園にはカンカナイ族やボントック族の男女が多数仕事を求めて山から下りてきており、ここで出会った女性と結婚する男性が多くいた。三吉によると「トリニダッド在住、日農78戸の中20余戸の農夫はナバロイ土人（イバロイ族：筆者注）を妻とし、その間に数10人の子供が生まれ、数軒の所にあるバギオの日本小学校に通学させ日本式の教育を授けて」いたという〔三吉 1942: 32-33〕。一方、バギオの東部や南部でも日系人の集落がみられ、ここでもイバロイ族やカンカナイ族の女性と結婚した者が多くいた〔Afable 2004a: 47-48〕。こうした女性たちはとてもよく働き、夫が作った野菜を毎朝早くから頭に乘せてバギオの市場に運んだ。彼女たちは「日本の農家の夫人と少しも異なるところがなく、夫婦間にいざこざがおきたという例は、かつて一度も聞いたことがなかった」し〔金ヶ江 1968: 691〕、日系人の夫も日本人の妻と変わらない敬意をもって彼女たちに接していたという〔Hamada 1983: 22〕。

こうして多くの日系人男性が他者を排除する「人種」の境界を越えてイゴロットと結婚するのはいったいどのような理由によるのかというと、まず経済的な事情が考えられるだろう。当時、独身男性が日本から花嫁を迎えるには多額の旅費や結婚の支度金を払わなければならない、商業地域で手広く商売をする豊かな日系人と比べ、経済的な余裕のあまりない農業や大工を生業とする日系人はイゴロットと結婚する方が多かった〔Hamada 1983: 22, Tamayo 2004: 253〕。またイゴロットと結婚することによって、アメリカ人を除く外国人が個人で土地を所有したり経営したりすることを禁じたフィリピン公有地法のもとでも、妻や妻の親族が所有する土地を自由に耕作することが可能となったからである〔大野 2008: 139-140〕。

次に、日系人とイゴロットとの身体的、文化的類似性もしばしば指摘される。たとえば日比新聞¹²⁾の主筆であった蒲原は、イゴロットは「色こそ黒いが其の容貌、風俗、習慣等が日本人に酷似している所から16世頃マニラに多数移住していたと言われている日本人の子孫であろうとの伝説もある」と述べており〔蒲原 1938: 846-847〕、さらに「全島に点在している20数種といわれる他の蛮族とは言語、風俗、風習が全く異なっており、日本の古代にみられたような萱葺の家に囲炉裏を切って住み、先祖代々に亘って山腹に階段式の棚田を耕して農耕をもって生活の基本としている。体格も日本人に似て胴長で足が短く、性質は精悍で武勇を尊び、礼儀正しくて正直である。（中略）しかも彼らは日本人と同じく天孫降臨の神話と伝説を持つ」とする〔金ヶ江

1968: 373]。こうした指摘が正しいかどうかは別として、イゴロットからみても日本人が同じ東洋人 (Orientals) であり、両者の文化が似ていることから親しみやすいと感じていた。たとえばイバロイ族の女性が子供を背に負うことや、女性が男性よりも下におかれることを良しとする、といったような点で同じであるという [Villarba-Torres 1991: 146]。

さらに、イゴロットの婚姻に関する考え方や制度が日系人との結婚に好都合であったという指摘もある。たとえばイバロイ族の社会では、しばしば双方の両親によって幼児婚約がなされ、その際、男性側の負担による婚約儀礼が行われるが、女性が結婚可能な年齢に達した時その結婚をとりやめたい場合には、単にこの儀礼でかかった費用を相手側に返済すればいいことになっている。そこで日系人の男性たちは喜んでこの費用を返済して婚約を破棄させ、イバロイ族の女性と結婚したという [Afable 2004b: 277-278]。

いずれにせよ、こうした出会いを可能にしたのは、前述のようにスペインの到着以前からイゴロットたちが交易を通して外の世界と頻繁な交流があり、また貨幣経済や賃金労働といった概念がすでに彼らの社会に浸透していたことと無縁ではないだろう。外国人居留者が多いバギオでは、フィリピン人女性が異民族の男性と結婚することは決して珍しいことではなく、アメリカ人やスペイン人、中国人なども現地の女性と結婚したという [大野2008: 141-142]。すなわち日系人とイゴロットとの出会いは、閉ざされた「伝統的な」社会ではなく、開かれた文化的に多様な世界において行われたということができるだろう。

2. 日系人・日本人の語りにみる関係性

これまで、いかにイゴロットが周縁化され「他者」として扱われてきたか、そしてそこに日系人がやって来たことでどのように新たな出会いがもたらされたかをみてきたが、次にかような人の移動によって造り出された境界がどのような「自己」と「他者」を生成し、あるいはその境界がどのように恣意的に変化したのかを、日系人やイゴロットたち、そして「外部の者たち」によって残された回想や記憶を手掛かりに明らかにする。

(1) 「他者」としてのイゴロット

フィリピンを植民地支配したスペインが「自分たち西欧の文明化された社会とは異なるエキゾチックな他者」として、あるいはアメリカが「野蛮な部族」としてイゴロッ

トを周縁化し、さらにはこうした植民者のまなざしが、植民地支配が終わった後でさえ解消されず「低地キリスト教民」によって継承されたことはすでに述べたが、いうまでもなく、日系人ないしは日本に住む日本人にとってもイゴロットは「他者」であった。とりわけそれは北部ルソンに居住していない日系人や日本人のまなざしに顕著であり、たとえば『比律賓年鑑（昭和十三年度版）』に掲載された、在比日本大使館の副領事による北部ルソンへの旅行記には「蕃族」「無知」「首狩り」「裸体」「不潔」などといった用語が散見される〔木原 1937: 69-100〕。また日本人初のフィリピン駐在ジャーナリストであった中谷も、イゴロットについて「文明の風の吹かない先住原始の蕃人部落であって、（中略）大部分は手に槍を持ち、ただ一片の布を腰に纏った自然崇拜の蕃人」と描いた〔中屋 1942: 222-223〕。過去30年間フィリピンについて学んできたという仲原が1935～1941年頃に見聞きした内容をまとめた紀行文では「自然の児であるイゴロットの原始的勇武の精神と強壮なる身体や恵まれた清涼な空気の中での生業活動、神を恐れ神の掟に従う行動など、文明に憧れない、寧ろ文明を嘲笑するかのように見える」彼らの姿を称賛し、文明人である事と、あらゆる文明的の雰囲気食傷している自分たち日本人が彼らの原始的アトモスフェル（atmosphere：筆者注）に誘引される訳を読者に問いかける〔仲原 1941〕。一方、1937年にこの地を探検調査した三吉はボントック族について「今なお往々首狩りの蕃風を有し靈魂崇拜の非基督教徒でルソン島の先住民族である。（中略）蕃人互に鬪争を好みスペイン領有時代には理外の蕃界として放置された所である」などと表現した。さらに三吉は、バギオとトリニダッドで働いている日系人農民とイゴロット農民との関係について「日系人は大抵少額資本で栽培に従事している関係上、金利の支払いに追われ、土地の所有権がないから借地している。農具肥料等もまた不十分であるから、これを借り、損料や利子を支払いかつ生活費も土農（イゴロット農民：筆者注）よりも高い（中略）。然るに土農は日農から栽培の秘伝を教えてもらい借地料や地租を支払わないばかりか、ややともすると日農を圧迫して追出そうとする傾向を持っていることは頗る戒心を要する。それでなくとも土農と支那農夫とは常に日農の敵となっていた」とする〔三吉 1942: 30, 34〕。こうしたまなざしは、とりわけアジアの「指導民族」としての教育、特に1918年以降に使われた国定教科書のなかで「南洋の土人」概念が植えつけられていたことによるという。すなわち、日本占領下のフィリピンではスペインやアメリカがしたのと同じように、日本人の下にキリスト教徒フィリピン人、イスラーム教徒、少数民族（イゴロット）という序列社会を造り出したのである〔早瀬 1996: 322-323〕。そして、それがフィリピンの日系人社会でも継承されたといえる。

また、日系人とイゴロットとの結婚は両親とも日系人の家族と母親がイゴロットの

家族を造り出すことになり、後者の子供はいくぶん差別的に「あいのこ」とか「混血児」と呼ばれた〔Tamayo 2004: 254〕。これについて、1930年代後半の日本人学校¹³⁾の様子について「土人を母とし、日本人を父とせる混血児の数は全生徒の四割を占めているが、この人たちは純粹の日本人に比し学業の成績は劣る。放課後復習をするにしても、予習をするにしても、母親の手では教習ができない。(中略) 且つ混血児の欠点は、礼儀を知らず、穢埃気に留めず、進取の気性少なく、推理の力なく、熱心が乏しい」との記録がある〔三吉 1942: 24-25〕。しかしその一方で、当時の日本人学校の教員や同級生の語りのなかでは「差別はなく友好的な関係が築かれていた」ことや「イゴロットの親たちも遠慮をしたり控え目でいたりすることは全然なく、明るかった」ことなどが強調されているのは注目に値する (cf. 三吉 1942: 25, 小島 1993, Tamayo 2004: 254)。

(2) 「他者」としての日系人

ベンゲット道路の開通は、日系人移民の勤勉な努力によるものであるとその功績がしばしば語られてきたが¹⁴⁾、そうした語りの反面で、移民取扱い会社によって送られたベンゲット移民の多くが非熟練労働者であり、フィリピン人や中国人労働者とさして変わらなかったのは事実のようである〔広島県 1991: 537-543〕。すなわちベンゲット移民もまた「彼らと同じぐらいひどかった」ということであるが、この表現は日本人がフィリピン人や中国人労働者を見下していたということを意味しているのに他ならない〔Yu-Jose 1997: 119〕。

しかし1920～30年代にかけて北部ルソンの日系人社会も変わり始め、もはや同質の非熟練労働者の集まりではなくなっていく。それは呼び寄せによる「同郷の人々」としての結束や社会階層、商業と農業、大工、技師などといった職業にもとづく階層分化などによるものであるが、さらにそれはさまざまな要素でもって差別化、序列化された。早瀬によれば、明治期末の数年間に2,000人ほどに達していた早期のフィリピン在留邦人の多くは定住性のない売春婦や道路工夫、大工などであり、躍進するアジアで初めての近代国家、日本の移民として決してふさわしい存在ではなかったという。しかも彼らは、それまでにフィリピン人がみた支配者、スペイン人やアメリカ人などの白人より体格・品格で見劣りし、白人が従事することのなかった肉体労働に従事していたため、フィリピン人の尊敬の対象にもならなかった〔早瀬 1996: 293-294〕。一方、近代日本では、学歴偏重を中心とする序列社会ができあがっており、日本占領下のフィリピンでは日本軍人、文官、内地から派遣の大会社の社員、戦前から居住する在留邦人、フィリピン人と続き、さらに日系人も内地出身者、沖縄出身者、フィリピ

ン人と結婚した者、前者の子供とに序列化された〔早瀬 1996: 322-323〕。とりわけ沖縄出身者はフィリピン人からみても異なる集団であり、大野によれば、ミンダナオ島ダバオの日系人社会では、フィリピン人たちは「平均的にやや低い身長、体毛の濃さ、豚好きなどといった食事の嗜好」などの面から沖縄出身者を本土日本人と見分け、後者をチャバカノ語¹⁵⁾で「オトロ・ハポン *Otro Hapon* (別の日本人)」と呼んで区別していたという。しかも沖縄出身の男性は、同郷人が経営の麻畑で現地労働者と一緒に肉体労働にあたった者が多く、彼らと同様に裸足で働き、手で食事をしていた。一方、本土の日本人は当時、一般的に沖縄出身者に対して根強い差別意識や備見を抱く傾向があり、それが海外の邦人移民社会でも温存され「二級の日本人」とみなされがちであった〔大野 2006: 7-9〕。中野は、これらに在留邦人社会には「2～3年の駐在で帰国していくエリート的日本人」と「永住覚悟で住みついたらろくに学歴もない無告の民の集団」〔矢野 2009: 92-93〕の二重構造が顕著であったとし、前者の後者に対する蔑視や警戒感、南方作戦を展開する日本軍や占領軍政に日本から派遣された官民の軍属にそのまま引き継がれたと指摘する。東南アジアにおける支配民族として自らを位置づけた日本にとって、在留邦人の存在がイメージを損なうことを軍政関係者は懸念したというのである〔中野 2012: 161-162〕。

しかしながらバギオでは、ダバオに比べ沖縄出身者が少なく、また商業従事者や大規模な農業経営者のなかには、かつてベンゲット移民だった者やベンゲット移民への小売業から功をなした者もいる (cf. Furuya 2004)。また「大手の銀行・商社の進出もなく、出張社員と地元の在留邦人という区分がなかったこと、従って貧富の格差もほとんどなく、比較的まとまりのある小日本人社会を形成していた」、「親は商売よりも野菜栽培や大工といった「生産」に従事している者が多かった」、「マニラのように貧富の差がなく総じて豊かであった」、「貧富の差は僅かにあったが、上下関係はあまりなく仲良くしていた」などといった回想をみる限り、そうした差別や格差はほとんどなかったように見受けられる。しかしその一方で「商売人や建築請負業の子弟は混血ではなかった」といった事実や、「イゴロット族は山に住んでいてトイレがないので、子供が学校に水洗便所があるにも関わらず慣れずに違和感があったためか床下に入って用便をするのに困った」といったような逸話もみられ、「農業主体で土地相手の永住覚悟の邦人が圧倒的であったことがこうした(差別・格差のない: 筆者注)関係を形成・維持していた」、あるいは日本の占領下「現地人を母親に持つ子供に対する日本精神への同化教育が、「格差」を押し隠した」といったことが同じ語りのなかにもみられることにも注意しなければならないだろう〔小島 1993〕。

終わりに

先に登場したリュウキチ・ハマダの息子で、フィリピンで最も有名な短編小説家の一人であるシナイ・ハマダSinai Hamadaの小説『タナバタの妻 (Tanabata's Wife)』は、トリニダッドの農園で高原野菜を栽培する日系人とポントック族の女性との「恋愛物語」である。この小説は実話にもとづくもので、日系人の男性はシナイの父のいとこ、妻のファスアンFas-Angも実在のポントック族の女性である。この名前「ファスアン」はポントック語で「境界を超える (to cross over a boundary)」ないしは「反対側に飛ぶ (to jump over to the other side)」という意味で、まさにファスアンが文化の違いを超えて、日系人と結婚するという話である。日系人とイゴロットとの間に生まれたシナイの作品のほとんどにこの「境界を超える」というテーマが使われているが、『タナバタの妻』においても「妻ファスアンが文化の違いに困惑し、一度は夫を裏切って子供と一緒に同じポントック族の男性と郷里に逃げ帰るが、最終的には夫のもとに子供と2人で戻る」というハッピーエンドな物語の展開において、ファスアンは2つの「境界」、すなわち「伝統的」なポントックの社会から「近代的」なバギオ、そして日本の文化とイゴロットの文化という境界を超えている。しかし実際の話では、ファスアンと一緒に逃げた男性にその後逃げられてしまい、子供だけをタナバタのもとに返している〔Hamada 1975, Villarba-Torres 1991〕。つまり、ファスアンは結局この2つの境界を超えることができなかつたことになる。

人の移動は新たな境界を造り出し、その移動によって現実となった異質なるものとの遭遇とそれに続く相互作用において、新しい「自己」新しい「他者」の生成が始まるが〔竹沢 1996: 265-266〕、日系人とイゴロットが他者を排除する「人種」を越えて結婚するには多くの困難があったに違いない。しかし、上述のような出来事は実際には多くみられたに違いないが、それが日本人や日系人の「理想化された語り・回想」のなかに現れることはない。他方、日系人が残した「功績」が、フィリピン人によって書かれた「歴史」に登場することはほとんどなく、一労働者として中国人と併記されるのみである (Cf. Scott 1969, Reed 1999, Bagamaspad A. and Z. Hamada 1985)。こうした事実は、日系人とイゴロットとの関係性を考えるとき、きわめて重要な意味をもつ。

そしてまた、人種的な差別、あるいは同じ日本人においてさえ差異にもとづく「他者」認識が行われた戦前の日系人社会において、バギオでは、イゴロットは明らかに自分たちとは異なる「他者」であるが、日系人たちは、その差異を認識しつつもこの地で生きていくための得がたいパートナーして彼女らを捉え、そしてまたイゴロット

もその「冒険心」も手伝って新たな関係を造りだし境界を越えた、あるいは越えようとした。しかし、太平洋戦争で日本がフィリピンを占領したことによって、日系人とイゴロットの境界の「媒介者」となるはずの2世が新たな「他者」となり、フィリピン人から差別と迫害の対象となっていったことを我々は忘れてはならないだろう。

<注>

- 1) フィリピン海外雇用庁 (Philippine Overseas Employment Administration) によると2011年には1,850,463人ものフィリピン人が海外へ働きに行っており、その数は年々増加しているという (<http://www.poea.gov.ph>, 2013年6月6日アクセス)。
- 2) 狭義のベンゲット移民とは、日本出発前からベンゲット道路工事に従事することを目的に渡航した労働者のことだが、実際にはそうでない者も多く、一般にはベンゲット道路工事に従事したすべての日本人を指す〔早瀬 1989a: 89〕。
- 3) ここでいう日系人とは、公益財団法人海外日系人協会による定義、すなわち「日本から海外に本拠地を移し、永住の目的を持って生活している日本人ならびにその子孫の二世、三世、四世などの人々で、国籍、混血は問わない」を意味する (<http://www.jadesas.or.jp/aboutnikkei/index.html>, 2013年6月20日アクセス)。ただし戦前フィリピンに渡った日系人の多くは永住目的というよりも「出稼ぎ労働者」で、フィリピン人の女性と結婚し、あるいは太平洋戦争によって家族が離散したことで期せずしてフィリピンに永住することとなった日系人も多いことから、ここでは「戦前にフィリピンへ渡った日本人ならびにその子孫」という意味で「日系人」という用語を用いることとする。
- 4) ダバオの日系人についてはHayase (1984) や大野 (1991)、蒲原 (1938) など、多くの研究や日系人による記録があるのでそちらを参照されたい。
- 5) 1908年にベンゲット、アンブラヤン、レバント、ポントック、カリंगा、アバヤオ、イフガオの7つを亜州とするマウンテン州がアメリカによって制定されたが、その後1966年にマウンテン、ベンゲット、カリंगा・アバヤオ、イフガオの4州に改編され、さらに1995年にはカリंगा・アバヤオが2つの独立した州になって現在の5州となった。
- 6) 国勢調査はスペイン統治時代にも何度か行われたが、それは税の取り立てと労働の徴用が主たる目的であったため、住民たちの大規模な抵抗にあった〔Census 1903, vol. 1-13〕。
- 7) バロウズBarrows, D. P.、ウースターWorcester, D. C.、ジェンクスJenks, A. E.などによって調査が行われた〔ラファエル 2004: 136-137〕。
- 8) 北部ルソンのイゴロットの集落で宋や明の時代の中国製の壺が多くみられることから、すでに10世紀頃には北西部沿岸に住んでいたイゴロットが中国のジャンク船交易に従事していたのではないかと考えられる〔Guy 1958: 58-61〕。
- 9) ベンゲット道路の工事ではピーク時で約4,000人の労働者が働いており、彼らを賄うには毎日約60トンの食糧が必要であった。そのため、その荷役として多くのイゴロットが雇われていたという〔Tapang Jr. 1985: 36〕。
- 10) 日系人男性が結婚したのは主としてイバロイ族やカンカナイ族、ポントック族であったが、その他に北部ルソンに移住してきた、ないしは頻繁に交易にやって来ていた低地民との結婚もみられた〔Tamayo 2004: 251-252〕。
- 11) 注9参照のこと。
- 12) 1935年7月にダバオ在中の日系人3名により創設された。日本人会の機関紙としての役目も務め、当初

- は週刊新聞であったのが1938年には日刊になり、約2,000部を発行した〔古川 1956: 400〕。
- 13) 1921年にバギオ日本人会が結成され、その運営で小学校が1925年に開校された〔大谷編 1937: 496-506〕。
- 14) こうした語りに多くの誇張や錯誤があることは早瀬による詳細な研究（1989b）があるので、それを参照されたい。
- 15) フィリピン諸島各地で話されるスペイン語と土着言語を基礎とした混成語を総称してチャバカノ（大衆の「ことば」）と呼ぶ（『フィリピンの事典』226頁、同朋社、1992年）。

<参考文献>

大谷純一編

1938 『比律賓年鑑（昭和十四年度版）』田中印刷出版。

大野俊

1991 『ハボンーフィリピン日系人の長い戦後』第三書館。

2006 「[ダバオ国]の沖縄人社会再考—本土日本人、フィリピン人との関係を中心に—」『移民研究』第2号、1-22頁。

2008 「異民族結婚した移民一世とメスティーソ二世」足立伸子編著『ジャパニーズ・ディアスポラ』新泉社。

カースルズ S. / M. J. ミラー

2011 『国際移民の時代』関根政美・関根薫訳、名古屋大学出版会。

外務省領事移住部

1972 『わが国民の海外発展：移住100年の歩み（資料編）』外務省。

金ヶ江清太郎

1968 『歩いてきた道—ヒリッピン物語—』国政社。

蒲原廣二

1938 『ダバオ邦人開拓史』日比新聞社。

木原次太郎

1938 「北部呂宋を旅して」大谷純一編『比律賓年鑑（昭和十四年度版）』田中印刷出版。

小島勝

1993 「第二次大戦前の日本人学校教員の教育体験・意識に関する研究—バギオ・満州・上海における教員への聞き取りを通して—」『龍谷大学論集』第443号、77-108頁。

佐藤喜徳

1993 「アギナルド将軍と邦人写真家」佐藤喜徳編『収録「ルソン」』第55号、146-153頁、比島文庫。

竹沢素子

1996 「[「白人」と「黒人」の間で] 青木保・内堀基光他編『移動の民族誌』岩波講座文化人類学第7巻、岩波書店。

仲原善徳

1941 『比律賓紀行』河出書房。

中野聡

2012 『東南アジア占領と日本人』岩波書店。

中屋健弼

1942 『フィリピン』興亜書房。

橋谷弘

- 1985 「戦前期フィリピンにおける邦人経済進出の形態」『アジア経済』第3号、33-51頁。
- 早瀬晋三
- 1989a 「アメリカ植民地下初期（明治期）フィリピンの日本人労働」池端雪浦・寺見元恵・早瀬晋三『世紀転換期における日本・フィリピン関係』AA研東南アジア研究第1巻、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 1989b 『「ベンゲット移民」の虚像と実像』同文館。
- 1996 「「ダバオ国」の在留邦人」池端雪浦編『日本占領下のフィリピン』岩波書店。
- 2012 『フィリピン近現代史のなかの日本人』東京大学出版会。
- 広島県
- 1991 『広島県移住史資料編』広島県。
- 古川義三
- 1956 『ダバオ開拓記』古川拓殖。
- 三吉朋十
- 1942 『比律賓の土俗』丸善。
- 矢野暢
- 2009 (1975) 『「南進」の系譜』千倉書房。
- ラファエル、ピセンテ L.
- 2004 「アメリカ植民地と異文化体験」永野善子編・監訳『フィリピン歴史研究と植民地言説』めこん。
- Afable, P. O.
- 1998 Eduardo Masferre's subjects: A Century of self representation in the Philippines. *Anales del Museo Nacional de Antropologia*. Numero 5: 83-108, Madrid.
- 2004a Building Bridges in a Faraway Place: Japanese Pioneers in Baguio and Benguet History. In Afable, P. O. ed., *Japanese Pioneers in the Northern Philippine Highlands*. Filipino-Japanese Foundation of Northern Luzon Inc., Baguio.
- 2004b "You husband Me and I wife you..." —How They Got it Started. In Afable, P. O. ed., *Japanese Pioneers in the Northern Philippine Highlands*. Filipino-Japanese Foundation of Northern Luzon Inc., Baguio.
- Bagamaspad A. and Z. Hamada
- 1985 *A People's History of Benguet*. Baguio Printing and Publishing Company Inc., Baguio.
- Furuya, H.
- 2004 (1939) Hideo Hayakawa, Pioneer Resident of Baguio. In Afable, P. O. ed., *Japanese Pioneers in the Northern Philippine Highlands*. Filipino-Japanese Foundation of Northern Luzon Inc., Baguio.
- Guy G. S.
- 1958 The Economic Life of the Mountain Tribes of Northern Luzon, Philippines. *Journal of East Asiatic Studies*, vol. 7-1: 1-88.
- Hamada, S.
- 1975 Tanabata's Wife. In *Collected Short Stories*. Baguio Printing & Publishing Co., Inc., Baguio.
- 1983 The Japanese In and Around Baguio Before the War. In *MEMORIAL: The Japanese in the Construction of Kennon Road*. Filipino Japanese Friendship Association of Northern Luzon,

- Baguio.
- Hayase, S.
1984 *Tribes, Settlers and Administrators on a Frontier: Economic Development and Social Change in Davao, Southeastern Mindanao, the Philippines, 1899-1941*. Ph.D. dissertation, Murdoch University.
- Jenks, A. E.
1905 *The Bontoc Igorot*. Department of the Interior Ethnological Survey Publications, vol. 1, Bureau of Public Printing, Manila.
- Okubo, B. Y.
2004 My Papa, the Maestro, from an Apprentice. In Afable, P. O. ed., *Japanese Pioneers in the Northern Philippine Highlands*. Filipino-Japanese Foundation of Northern Luzon Inc., Baguio.
- Reed, R. R.
1999 (1976) *City of Pines*. Monograph Center for South and Southeast Studies, University of California.
- Scott, W. H.
1969 *On the Cordillera*. MCS Enterprises, Manila.
1982 (1974) *The Discovery of the Igorots*. Revised edition, New Day Publishers, Quezon City.
- Tapang Jr., B. P.
1985 *Innovation and Social Change: The Ibaloy Cattle Enterprise in Benguet*. Social Science Monograph Series 5, Cordillera Studies Center, University of the Philippines College Baguio.
- United States, Bureau of the Census
1905 *Census of the Philippine islands, taken under the direction of the Philippine commission in the year 1903*, vol. 1, 4.
- Villarba-Torres, A. K.
1991 Fas-Ang: Cross-Cultural Currents in the Literature of Sinai Hamada. *Philippine Studies*, vol 39: 135-157.
2005 Negotiating Ethnicity: Images of the Igorota in the Short Fiction of Sinai C. Hamada. *Journal of English and American Studies*, vol. 4 (<http://jeas.co.kr/sub/cnt.asp?num=42&volnum=4>)
- Worcester, D. C.
1914 *The Philippines Past and Present*, 2 vols., Macmillan Publishing Co., New York.
- Wilson, L. L.
1965 *The Skyland of the Philippines*. Bookman Inc., Quezon City.
- Yu-Jose, L.
1997 Japanese OCWs to the Philippines. *Philippine Studies*, vol. 45-1: 108-123.